

第122回 三方限古典塾（'16, 12, 15）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3－39）

1 波浪の天を兼ねるや、舟中は惧るを知らずして、舟外の者は心を寒くす。
猖狂の座を罵るや、席上は警むるを知らずして、席外の者は舌を咋む。故に
君子は、身は事中に在りと雖も、心は事外に超えんことを要するなり。 後集 130

（意識） 波が天まで届くような荒海でも、舟の中の人はその怖さに気づかず、陸から見て
いる人のほうが、かえってらはらしているものだ。

宴席で酔っぱらいが、わめきちらしていても、仲間の者はこれを諫めようとはしないが、
傍で見ている者がかえって苦々しく思っているものだ。だから君子たる者は、その渦中に
身は置いていても、心はその事の外に超えて、第三者の客観的な見方が必要である。

（余説） 室町時代に能を大成させた世阿弥の能楽秘伝書『花鏡』に「離見の見」があり
ます。舞う演者の観点が「我見」、見ている観客の観点が「離見」です。我見では目の前
や左右を見ることはできるが、自分の後ろ姿や演じている姿は見えない。しかし、離見で
は、演者が見えないところまで見えています。つまり、演者は自分が見ている我見だけで
なく、観客の目を通して演じている自分の姿も見ることによって、美しい所作や芸の完成
を遂げることができるということです。

このことは舞いのみでなく、日々、情報の波に追われる今の時代こそ、他者の目を通し
て自分と向かい合うという姿勢が求められているように思います。一方それを気にしすぎ
ることはどうでしょうか。離見と我見の双方を大切にし、そのバランスこそ必要です。

2 人生は、一分を減省せば、便ち一分を超脱す。如し、交遊減ぜば、便ち、
紛擾を免れ、言語減ぜば、便ち愆尤寡く、思慮減ぜば、則ち精神耗せず、聡明
減ぜば、則ち混沌完くすべし。彼、日に減ずるを求めずして、日に増すを求むるは、
真に此の生を桎梏するかな。 後集 131

（意識） この人生では、何事につけ、ほんの少し減らすことを考えると、その分だけ世俗
のもめごとから抜け出すことができる。もし人との交際を減らしたならば、その分だけい
ざこざから逃れることができるし、自分の口数を少しでも減らせば、その分だけ過失も少
なくなり、思案分別を減らせば、その分だけ心の疲れが減る。

利口ぶるのを減らせば、それだけ本性を全うできる。減らすことを考えずに、増やすこ
とばかり考えている者は、自分の一生を手かせ足かせで束縛しているようなものだ。

（余説） 「なるほどなあ」と思い当たることばかりです。ただ、ここで言っているのは、
「何もかも整理して隠遁せよ」ではありません。減らすのは「ほんの少し」でよいのです。
「ほんの少し」なら、力まずに気軽に挑戦できます。年賀状を書く季節でもあります。

「ほんの少し」でも減らせば、少なくとも増えてはいません。また、何を保持すること
にして、何を減省するのかという判断が大切なように思われます。

この消費社会で、身邊にある物も少しだけ減らすことを考えてはどうでしょうか。

（参考） 耶律楚材「一利を興すは一害を除くに如かず。一事を生ずるは一事を省くに如かず」
耶律楚材：モンゴル帝国（元代）初期の名宰相（1190～1244）

3 天運の寒暑は避け易きも、人の世の炎涼は除き難し。人の世の炎涼は除き易きも、吾が心の氷炭は去り難し。此の中の氷炭を去り得ば、則ち満空は皆和氣にして、自ずから地に随いて春風有り。 後集 132

(意識) 季節の変動による暑さ寒さはなんとか避けられるが、人情の好意や悪意の感情を除くことは難しい。また、そのような人情は何とか除くことができたとしても、己自身の心の動揺を始末するのはもっと難しい。己自身の心の動揺を始末できたならば、心の中はすっかり和らいで、自ずからどこにいても春風がそよぐ心境になれる。

(余説) 季節の寒暑や人の心の好悪の情よりも、己の心のコントロールが難しいことは、私にも十分に納得できます。しかし、「こころ」とはどこにあって何なのか、それは現代科学でも解明できていません。また、「たましい」とはどう違うのか、難しい問いです。

河合隼雄は「たましいということは、意図的なあいまいさをもつ概念であり、それは明確な定義を嫌う」「たましいとは、夢をつくりだす主体である」(宗教と科学の接点・岩波書店)と書いています。さらに、加賀乙彦は「魂とは喜怒哀楽の心の動きではなく、もっと奥にあって人間を支えているものである」「心理学では人の心のごく表層のものの考え方しかわからない」(科学と宗教と死・集英社新書)と書いています。

それでも、自分の心の動揺をできるだけ減らすことには努めたいものです。

4 釈氏の随縁、吾が儒の素位、四字は是れ海を渡るの浮囊なり。蓋し、世路は茫々たり。一念も全きを求めば、則ち万緒紛起す。寓に随いて安んぜば、則ち入るとして得ざる無し。 後集 134

(意識) 仏教で説く「随縁(縁起に随う)」と、わが儒教で説く「素位(地位に安んずる)」という、この四文字は、人生という広々とした苦海を渡る上で欠くことのできない浮き袋のように大切なものである。思うに、人生行路は広々として果てしないものである。そのようなところで、少しでも完全を求めようとすると、あらゆる欲望の緒が乱れ起こってくる。今置かれている境遇に従って安らかにしていると、この先、どんな境遇に置かれようとも、安心立命の境地を得られぬはずがない。

(余説) 「菜根譚」はここで最終章として「まとめ」ています。要するに「置かれた状況に満足して、あまりじたばたするな」ということです。この言葉は、国の内外の状況や、歴史などから考えると、適切な忠告であるようにも思われます。しかし一方では、「小成に甘んじることなく」、より大きな目標を目指すことによって進歩が期待できます。

(参考) 論語・憲問「曾子の曰わく、君子は思うこと其の位を出でず」

(身分不相応なことを考える必要はない)

中庸「君子其の位に素して行い、その外を願わず。富貴に素しては富貴に行い、貧賤に素しては貧賤に行い、夷狄に素しては夷狄に行い、艱難に素しては艱難に行う。君子は入るとして自得せざるなし」

(いかなる境遇でも、不平不満の念を起こさず、悠々自適するものである)

臨濟録「随处に主と作れば立处皆真なり」

(いかなる境遇でも主体性を失わなければ、その場で真実をつかむことができる)